SURE 静岡大学学術リポジトリ
Shizuoka University REpository

安川定男・上杉省和編：『作品論・有島武郎』

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2015-07-02 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 大嶋, 仁 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.14945/00008872

安川定男・上杉省和編

『作品論・有島武郎』

大嶋　仁

本書は双文社出版から『作品論　太宰治』『作品論　夏目漱石』などと共に出版された本格的有島文学研究の集成である。

文学研究には大きく分けて三つあるかと思われる。この三つは、研究対象に応じて分けた場合に生ずる。一つは作家研究。作家が研究対象となる。二つは作品研究。ある作家の作品を研究対象とする場合で、本書はそれに相当する。第三は「文学」研究。すなわち文学そのものを研究対象とするもので、特定の作家やその作品を対象とするのではない。たとえば伝記文学の研究。キリスト教文学の研究。また明治十年代の小説の研究等々。

はじめの二つは共に特定の作家と結びついているのに

対し、第三の研究はそうではない。この第三の研究は、近年欧米ではめざましく進んでいる様子だが、我国では相変らず作家研究が中心であり、作品研究すら充分とは言えない。そういう現状からすれば、有島研究が作品論に絞ってまとめられた本書は、価値ある一書と言えよう。

作品論をつうじて有島武郎という人に迫ろうというのが本書の狙いと思われるが、それは作家の伝記的事実の寄せ集めが最も科学的な方法だと永年思われてきた我国の文学研究の体質を一新する試みであり、その意味で編者および出版編集者は賞讃に値しよう。もっとも筆者自身は、作品をつうじて作家に迫まらずともよく、作品は作家から全く切り離して論じてもさしつかえないようにも思うが。

筆者の意見はさておき、本書の内容を紹介しておこう。有島武郎の二十一の作品について、十八人の研究者が書きおろしの論文を並べる本書は、巻末に編者が掲げた作品別参考文献および年譜によって締めくくられる。編者は安川定男、上杉省和の両氏。参考文献の作成には上杉、年譜の作成には安川の各氏が当たっている。論文執筆者は、巻頭から順に松本忠司、坂田憲子、石丸晶子、蒲生芳郎、上杉省和、外尾登志美、福田準之輔、相原和邦、大里恭三郎、ハルオ・シラネ、江頭太助、内田満、福本彰、江種満子、竹腰幸夫、永平和雄、野島秀勝、磯田光一、以上の十八氏である。

それぞれの論文であるが、松本氏は『かんかん虫』をもとに有島とゴーリキイの類似点を指摘している。坂田氏は『お末の死』に、有島の「死」への志向を読み取る論である。石丸氏は『宣言』内部の構造を明らかにし、作家論への踏み台にしようとしている。蒲生氏は解釈の分かれる『カインの末裔』に一更説得力ある解釈を呈示している。そして上杉氏は『実験室』という小品に、有島の倒錯した愛を見出し、従来の評価をくつがえす。更に外尾氏は『クララの出家』に魂による霊肉の統一とそれによる魂自体の絶対化という哲学を読み、福田氏は『迷路』を有島の最も誠実なる告白と読むのである。

『生まれ出づる悩み』を論ずる相原氏は、そこに自然観と労働観の過度の理想化を見ている。『石にひしがれた雑草』を論ずる大里氏は「石」と「雑草」の意味探求から有島文学に迫り、シラネ氏は『或る女』をアメリカ自然主義とピューリタン文学の文脈において把握し直している。また、『星座』を論ずる江頭氏はそこに文学的方法の画期的性格を指摘し、『酒乱』を論ずる内田氏はこの作品の私小説性に有島最後の「日記」を見出すのである。そして福本氏の『親子』論は先行論文に疑問をぶつけつつこの作品に否定的評価を下すことになる。

『三部曲』を『迷路』との関連で位置づけた江種氏、

「死と其の前後』における夢の場面の不整合から有島の妻への無理解を覗く竹腰氏、更に『御柱』『ドモ又の死』『断橋』に有島文学としての価値を見出し得ぬとする永平氏、これら三氏はともに有島の戯曲に論の対象を選んでいる。そして巻末をかざる野島、磯田の両氏は、有島の論文『惜みなく愛は奪ふ』および『宣言一つ』を論ずるのである。前者は分裂せる魂の一元化の希求という観点で論じ、後者は今日的状況からの有島の宣言（マニフェスト）の意味づけを行っている。

総じて、本書におさめられた作品論は、作家の生活、作家の創作過程との密接な関係において論じられたものが多い。筆者の意見を再度言わせてもらえば、作品論を文学論へと導くような論が殆んど無いということが惜まれる。文体分析、構造分析という作品論の重要な一方法が欠落しているのである。一つの文学作品は無論その作者から生まれる。しかしそれと同程度に、作品は時代と社会の産物であり、また更には書かれている言語および他の文学作品によっても生み出されているのではないだろうか。

（双文社出版、昭56・6刊、三九〇〇円）